

# Gawain の死をめぐる一考察

—Malory の独創性について—

西 納 春 雄

Sir Thomas Malory の *Le Morte Darthur* (以下Mと略す) は, Malory の独創によるものではない。これは, それ以前に流布していた Arthur 王とその宮廷に関する数多くの物語の集大成である。Malory はいわば編纂者として, 他の多くの中世文学作者と同じように, 原典を模倣しつつ改作して, この大作を作りあげたのである。

この小論で考察するのは, 作品の最後の部分, E. Vinaver の定本によれば “The Most Piteous Tale of the Morte Arthur Saunz Guerdon” にあたる部分である。<sup>1</sup> その概略を述べると, まず Lancelot と Guinevere の不倫の恋が露見する, Lancelot は火刑に処される Guinevere を救出する, がこの時 Gawain の弟 Gareth (Malory 以前の流布本では Gaheriet) を誤まって殺害する, 悲しみに狂う Gawain は Lancelot と徹底的に対立しこれが契機となって円卓騎士団が崩壊し, 主要な登場人物もそれぞれの末路を辿る, というものである。

Malory はこの部分を書くのに2つの原典を用いた。1つは中世仏文学の傑作 *La Morte le Roi Artu* (以下MAと略す)<sup>2</sup>であり, 今1つは中英語の押韻詩 *Le Morte Arthur* (以下MHと略す)<sup>3</sup>である。前者は作者不詳で, 1230年頃完成された散文体による聖杯物語群 the Vulgate Cycle の末尾を飾る作品である。後者も同じく作者不詳で, 14世紀中葉に書かれた8行一連から成る押韻詩であり, この作品は前者の韻文体への翻訳であるが, 長さは約五分の一に, そして原作 MA にある複雑な筋の錯綜, 豊富な心理描写を

整理して、荒削りな性格描写と速かで直線的な筋の運びに特徴がある。

Malory はこの二つの作品を単に数式的に結合して自己の作品を完成したのではない。そこには作者の取捨選択の意志が働いており、作者独自の解釈と独創が加えられている。この小論では、Malory の作品とその原典における Sir Gawain の性格描写に注目して、Malory の Gawain 像における独創性を探りたい。論を進めるに当たり、Gawain の人間像を、1. Gawain の高潔さ、2. Gareth の死をめぐる人間関係、3. Gawain の行動理念の異質性、4. Gawain の肉体的限界認知、5. Gawain の悔悟、6. 死の主題、以上6つの面に分けて考察したい。

1. Gawain の高潔さ：Malory の作品の最後の部分における Gawain は正義感の強い騎士として登場するが、その特質は、Agravaire らによる陰謀の阻止、Guinevere 処刑に対する反論、そして Agravaire らの死に対する忍苦によって知ることができる。

まず Arthur 不在の宮廷に於て、Lancelot と Guinevere の密通を暴露しようとする Agravaire の企てを知り、これに反対する Gawain を見よう。まず MH では、Agravaire の陰謀に Gawain は次のように反論する。

“Wele wote we,” sayd syr gawayne,

.....

“launcelot is hardy knyght and thro;  
 kyng and courte hade ofte bene slayne,  
 Nad he bene better than we mo;  
 And sythen myght I neuyr sayne  
 The loue that has bene by-twene vs twoo;  
 launcelot shalle I neuyr be-trayne  
 By-hynde hys bake to be hys foo.

.....

launcelot is kynges sonne full good,

And therto hardy knyght and bolde,  
 And sythen and hym ned by-stode,  
 Many A lande wolde with hym holde;  
 Shedde ther sholde be mykelle blode  
 For thys tale, yiffe it were tolde;  
 . . . . (ll. 1688-1709)

ここで強調されているのは、Lancelot 個人の力と彼の一族の勢力、そして Lancelot の宮廷における重要性である。<sup>4</sup> これを見れば Gawain の慎重さが印象づけられるが、彼が口にする Lancelot との個人的な絆、即ち “loue” はその根拠が明らかにされていないので説得力を欠く。一方Mで Gawain が強調するのは Lancelot の脅威よりむしろ彼に対する恩 “noble dedis and kyndnes” である。これは Lancelot に生命を救われたことに対する不変の忠誠心である。

“Nat be my counceyle . . . for, and there aryse warre and wrake betwyxte sir Launcelot and us, wyte you well, brothir, there woll many kynges and grete lordus holde with sir Launcelot. Also . . . ye muste remembir how oftyntymes sir Launcelot hath recowed the kynge and the quene; and the beste of us all had bene full colde at the harte-roote had nat sir Launcelot bene bettir than we, and that hathe he preved hymself full ofte. And as for my parte . . . I woll never be agaynste sir Launcelot for one dayes dede, that was whan he rescowed me frome kynge Carados of the Dolerous Towre and slew hym and saved my lyff. Also, brother, sir Aggravaine and sir Mordred, in lyke wyse sir Launcelot rescowed you bothe and three score and two frome sir Tarquyne. And therefore, brother, methinkis such noble dedis and kyndnes

shuld be remembirde.” (1162)

また MH に於いては Gawain の反対意見は一度きりであるのに対し、M の Gawain はさらに二度阻止を試みる。反復される説得によって Malory は Gawain の公正さを強く印象づけている。

MA に於ては Gawain は Agravain の企てを直接に止めようとはしない。彼は入廷した Arthur に Agravain の発言を無視するように言うが、これは却って Arthur の猜疑心と怒りを誘発する。Agravain の言葉を真に受けて怒りに狂う Arthur を Gawain は再度たしなめようとするがこれも Arthur に無視される。要約すれば、MA の Gawain は Agravain に対しても Arthur に対しても影響力が薄い。彼は重要な役割を与えられていない。

さて Agravain らは Lancelot と Guinevere の不義の現場を捕えるべく罾を仕掛けるが、Lancelot がこれより武力をもって逃れると、この知らせが宮廷に届く。MA 及び M に於ては Lancelot を捕えに行った十四人のうち Agravain を含む十三人が Lancelot によって殺害され、宮廷に帰り着くのは手負いの Mordred 一人である。親族の死を聴く Gawain の感情を追ってみよう。まず MH に於ては、Gawain は Mordred の報告を Arthur とともに聞く。意外な不幸の知らせに Gawain の心は “colde (sorrowful)” になる。が、自分は事前に彼等に警告したのだ、彼等は自らの愚行によって死を招いたのだと自分自身に言い聞かせる。

Whan it herde syr gawayne,  
That was so hardy knyght and bolde,  
“Allas! is my brother slayne?”  
Sore hys herte be-gan to colde;  
“I warned wele syr Aggrawayne,  
Or euyr yit this tale was tolde,  
Launcelot was so myche of mayne,  
A-yenst hym was strong to holde.” (ll. 1912-1919)

Malory はこの Gawain の忍耐をさらに発展させる。それは Gawain の 2 人の息子 Florens と Lovell を犠牲者に加えることによってなされる。これは原典にはない。Mによれば、Lancelot の逃亡と家臣の殺害に怒る Arthur は Gawain に Lancelot への反感を芽生えさせようとする。だがこれに応ずる Gawain は冷静かつ慎重であり、Arthur の激情と著しい対照をなす。

“ . . . insomuch as I gaff hem warnynge and tolde my brother and my soones aforehonde what wolde falle on the ende, and insomuche as they wolde nat do be my counceyle, I woll nat meddyll me thereof, nor revenge me nothyng of their dethys; for I tolde them there was no boote to stryve with sir Launcelot. Howbeit I am sorry of the deth of my brother and of my two sunnes, but they ar the causars of their owne dethe; for oftyntymes I warned my brother sir Aggravayne, and I tolde hym of the perellis the which ben now fallen.”

(1176)

この Malory の Gawain は、卑劣な行爲を断じて許さない、Arthur を凌ぐ高潔、正義、忍耐の騎士として描かれている。

MA と M では Arthur は悲報を受けるとすぐに Guinevere の処刑を決定する。MA での Arthur は独裁的であり報復的である。家臣には Arthur に反対する者も多い。Gawain も Arthur の処置に異を説えるが、Arthur は気をそらせていてこれを聞きすです。Gawain の忠告は全く聞き入れられない。一方 MH では Arthur の影響力は強くなく、Guinevere 処刑の決定は合議によってなされる。Gawain はこの決定に直接異論を説えることなく処刑に不参加の意志表明を行うだけである。“Gawayne wolde neuyr be nere by-syde/There Any woman shuld be brente . . .” (ll.1938-1939)

原典における影の薄い Gawain とは対照的に、Malory の Gawain は Arthur と対峙し、対等に堂々と意見する人物である。Gawain は一貫して

Queen の貞節を主張する。 “I dare sey . . . my lady, your quene, ys to you both good and trew.” (1175) さらに彼は女王 Guinevere の尊厳を傷つける処刑には立会えないと Arthur の頼みを断固として拒絶する。

“ . . . wyte you well I woll never be in that place where so noble a quene as ys my lady Gwenyver shall take such a shamefull ende.” (1176)

また MH では “Any woman” とあったのに M では “quene,” “dame Gwenyver” とされ、Gawain の Guinevere への忠誠心が明らかにされている。以上のように Malory の Gawain は、理不尽な要求はたとえ Arthur のものでもこれを退け、賢明な判断力をもって自分の正しいと信ずる道にあくまでも忠実な正義と高德の士である。

2. Gareth の死をめぐる人間関係：次に眼を転じて Gareth の死とその周辺を探ってみよう。ここで Malory が独創しているのは Gareth 自身の高潔さに加えて、Gareth と Lancelot との、また Gareth と Gawain との親密な関係である。Malory はこれに Gawain の Lancelot への強い信頼と同情を皮肉に作用させて、偶発的な Gareth の死の意外性と悲劇性を Gawain にさらに強烈に印象づけるのである。

まず Gareth 自身の性格づけを調べよう。Gareth の美德は MH, MA では Agravaing の陰謀と Guinevere の処刑への不参加でしか表わされていないが、M では Gareth は Agravaing の陰謀にはっきりと言葉に出して反対を宣言しその正義感が強調される。M ではまた Arthur の要求により Guinevere の処刑にやむなく立会う時にも、それが彼の意志に反したものであることを明言する。 “Sir, ye may commaunde us to be there, but wyte you well hit shall be sore ayenste oure wyll.” (1176) さらに Malory はこの Gareth に “the good knyght” “the noble knyght” と讃辞を冠しているが、これは他の登場人物には稀なことである。以上のように Malory は Gareth に若く正義感の強い騎士として、原典にはない美德を与えている。

次に Gareth と Lancelot との関係を見よう。M においては、Lancelot は何よりもまず Gareth を騎士に叙任した人物である。これは原典にはない Malory の独創である。<sup>5</sup> 封建的騎士社会では、騎士叙任に於て確立された主従関係の緊密さは実の親子兄弟の愛情の絆に勝るとも劣らない。特に忠誠を重んずる Gareth に於てはなおのことである。そして Agravain に陰謀参加をもちかけられた時、彼は自分と Lancelot との絆ゆえにこの誘いを拒否する。“I shall neve say evyll by that man that made me knyght.”(1162) またこの二人の友愛 “love” はこの後 Arthur, Gawain と Lancelot によって事ある度に繰返され、最愛の者を自らの手で失った Lancelot の Gareth 殺害の悲劇性と意外性を物語の底流に深く印象づける。<sup>6</sup>

一方 Gareth と Gawain との関係はどうであろうか。原典、M ともに共通して Gareth と Gawain との愛情は強く、Gawain の Gareth への愛は Gareth が悲業の死を遂げる時に最も明白となる。MH と M に於ては、Arthur は Gareth の死を知ると、これを Gawain に告げぬように命じる。Gawain の Gareth への愛を知ればこそである。M より引用しよう。

“I charge you that no man telle sir Gawayne of the deth of  
hys two brethirne, for I am sure . . . whan he hyryth telle that  
sir Gareth ys dede, he wyll go nygh oute of hys mynde. (1183)

この Arthur の予言通り Gawain は Gareth の死に大きな衝撃を受ける。Gawain の非常な悲しみは三作品に共通する。MA, MH では、Gawain は Gaheriet の死を聞くとすぐに宮廷へ駆けつけ、屍を見て卒倒する。MA では、

Et quant li rois vit venir monseigneur Gauvain, si dist:  
“Gauvain, Gauvain, veez ci vostre grand duel et le mien; car  
ci gist morz Gaheriet vostre frere, li plus vaillans de nostre  
lignage.” Si le li moustre tot ensi sanglent com il estoit entre  
ses bras contre son pis. Quant messire Gauvains entent ceste  
parole, il n’a tant de pooir qu’il responde mot ne que il se

tiengne en estant, einz li faut touz li cuers, si chiet a terre pasmez. (130-131)

(When the king saw Sir Gawain arrive, he said: “Gawain, Gawain, here is surpassing grief for you and for me, for here lies dead your brother Gaheriet, the most valiant in our family.” He showed him the body, bloody as it was, clasped between his arms against his breast. When Sir Gawain heard these words, he had no power to answer nor to stand erect. Instead, his heart failed him, and he fell to the floor in a faint . . . .)

そして MH では、

Whan he hys brother sawghe with syght,  
A word myght he speke no more;  
There he loste mayne and mght  
And ouyr hym felle in swounyng thore. (ll. 2002-2005)

また M では Gareth の訃報に “Alas, seyde sir Gawayne, ‘now ys my joy gone!’” そして宮廷に駆けつけ Arthur に “A, myne uncle kyng Arthur! My good brothir sir Gareth ys slaine, and so ys my brothir sir Gaherys . . . .” (1185) と泣きくずれる。Malory は Gareth を特に “good brothir” と呼ばせて Gawain と彼の親密さを示していることに注意したい。M においては、Gareth の死の悲劇性が、最愛の肉親を失う Gawain の面からもより注意深く見つめられている。

Gareth の死の重要性はこればかりではない。それは Lancelot への Gawain の忠誠と信頼が裏切られるということをも意味することになる。これは Malory の独創である。Gawain は Agravain の陰謀にも、Lancelot の味方となり一貫して反対しつづけた。Lancelot の武勇を認め、彼の行為に恩を感じているのである。さらに Gawain は、Lancelot の Guinevere

救出に深い同感の意を表わす。これは彼が、辱めには生命を賭けて戦うという Lancelot の美德を共有しているからだ。Gawain は女王の純潔立証のために自らも身を挺するとまで言う。<sup>7</sup> しかし皮肉にもこの Gawain は、Lancelot の Guinevere の救出によって Gareth を失い、Lancelot への全幅の信頼と温情を一気に裏切られる事になる。

以上の人間関係の重圧を孕みつつ、Gareth 殺害の件は M に於ては原典にはない意外な展開を見せる。まずこの部分を MA から見てみよう。MA に於ては、Arthur の脅迫により Gaheriet はやむなく Guinevere の処刑に立会うが、彼は武装したのち出かける。これに比べ、MH と M では Gareth は一切の武具を身にまとわない。M では Gareth は、この行為は Arthur の不当な命令に対する自分の抵抗を示すものであるとまで言う。さて火刑場で Guinevere が処刑されんとする時、Lancelot らが切り込む。MA の Gaheriet は、味方が次々と撃たれ自分の兄までが切り倒されるに及んで激怒し、剣を抜いて応戦する。これを見た Lancelot の側近 Hector は Gaheriet に切りかかって兜を飛ばすと、Lancelot がそれと知らずに剣で打据え頭を割る。Lancelot は戦いの後になって Hector らの証言により Gaheriet 殺しを認知する。一方 MH に於ては Gaheriet の死の直接原因は明らかにされない。“Gaheriet and Gaheries bothe were slain/with many a doleful deths wound.” また、Lancelot は後に Gaheriet の死を知り悲しむが、彼自身の殺害は認知せず、<sup>8</sup> しかも Gaheriet が自分にたちむかったと思い込む。

“Lord,” he said, “what may thys bene?

Ihesu cryste! what may I sayne?

The loue that hathe be-twexte vs bene,

That euyr gaheryet me was a-gayne!” (ll. 2022-2025)

以上の原典と比較して、M では Gareth の非武装、無抵抗と Lancelot 自らの手による殺害が明記されている。

And so in thys russhynge and hurlynge, as sir Launcelot thrange here and there, hit mysfortuned hym to sle sir Gaherys and sir Gareth, the noble knyght, for they were unarmed and unwares. (1177)

しかし Malory は、Lancelot が彼等を殺したのは偶然であり、その事実を全く知らなかったと力説する。“Howbeit in very trouth sir Launcelot saw them nat.” (1178) Malory は、殺される Gareth の innocence, 殺害者 Lancelot の明示、そしてこの事件の偶然性を明らかにして Gareth の死の意外性と悲劇性を高めようとする。

以上の考察で明らかなように、Malory は Gareth の死をめぐり、Gareth 自身の徳、彼と Lancelot との封建的主従関係、Gareth と Gawain との兄弟愛、Gawain の Lancelot への信頼をその作品の中で強調する。この緊密かつ周到に準備された関係が、偶発的な Lancelot の Gareth 殺害によって一気に Gawain の上で崩壊するのだ。Gawain の悲劇は、Gareth の死そのものと、それによって引き起こされる運命の急転とにある。

ここで、Gareth の死を知り Lancelot に復讐を誓う Gawain に眼をとめてみよう。Malory の Gawain はここにおいても原典とは異なる。まず MA では、Gawain は気絶より目覚めると運命の女神を呪った後次のように言う。

“ . . . je sui cil qui pus ne quier vivre, fors tant sanz plus que ge vos aie vengié del desloial qui ce vos fist.” (131)

(“ . . . I am a man who would no longer live. except until the hour when I have avenged you upon the disloyal wretch who did this to you.”)

ここで注意すべきは、Gawain は Gaheriet を殺した相手が誰であることを知らないまま復讐を誓っていることだ。即ち、Gawain は相手が何者かを知らずに自分の激情をぶつけているのだ。故に MA では Gawain の性急さと報復心の強さが印象づけられる。MH では気絶の後次のように言う。

“Be-twixte me And launcelote du lake  
 Nys man in erthe, for sothe to sayne,  
 Shall trews sette and pees make,  
 Er outhur of vs haue other slayne.” (ll. 2010-2013)

この Gawain は Lancelot の Gaheriet 殺害を既に知っている。しかし MH においても MA と同様に、Gawain は死の経緯を知ろうとはしない。やはり彼の性急な報復的性格が強調される。しかしこれら原典と比較した Malory の Gawain はより慎重である。Gawain が Gareth の死を納得するのは、死を報ずる使いに前後四回に渡り Gareth の死とその経緯を確認した後であり、さらに Arthur の口から事実を聞いて Gareth の死を確信するのだ。しかも Malory の Gawain はすぐに報復を口走らない。報復を最初に口にするのは Arthur なのである。“And therefore lat us shape a remedy for to revenge their dethys.” (1185) この事実は意義深い。即ち M においては、Gawain は最愛の弟の死の悲しみとそれに伴う Lancelot との人間関係の崩壊をぎりぎりの土壇場までこらえるのだ。そして Arthur の “revenge” の一言によって、彼の苦悩の激流が最後の自己抑制の壁を突き破り、一挙に噴出するのである。

“... now I shall make you a promyse whych I shall holde be my knyghthode, that frome thys day forwarde I shall never fayle sir Launcelot untyll that one of us have slayne that othir. ... I woll be revenged uppon sir Launcelot thorowoute seven kynges realmys, but I shall sle hym, other ellis he shall sle me.” (1186)

MA, MH の Gawain と比べた場合、Malory の Gawain は、より激しい精神的苦悩を経験し、それ故により大きな苦痛に玩ばれるのである。

3. Gawain の行動理念の異質性：さてここで、Gawain の報復心を誘発する Arthur の言葉に必然性があるだろうかを考えてみる。Arthur の言葉

は、復讐を誓うことで Gawain の悲しみを軽減しようとするものと解釈できるが、この言葉はさらに深い意味がありそうだ。それを探るために Arthur が堅持している騎士社会の理念<sup>9</sup>を、円卓の騎士の死と、Lancelot と Guinevere の不義に対する彼の態度において調べてみよう。M において、Lancelot が Guinevere を火刑より奪取したとの知らせに Arthur の心を満たすのは、その際に自分の騎士が殺害された屈辱感であって、Guinevere 喪失の悲しみではない。

“And much more I am sorryar for my good knyghtes losse than for the loss of my fayre queene; for quenys I myght have inow, but such a felyship of good knyghtes shall never be togethirs in no company.” (1184)

つまり Arthur の理念は、騎士中心の封建的社会秩序の維持と、それに対する汚辱をそそぎ、名誉を守るという行動規範をその根底として持っているのであって、そこでは Guinevere の夫としての個人的感情は二の次とされる。これは Malory の独創であって、MA, MH には該当する部分はない。この Arthur の理念は、彼が Lancelot と Guinevere の不義に薄々気付きながらも、不義追求による騎士 Lancelot の喪失を恐れてこれを見逃していたことでも裏付けられる。“... the knyge had a demyng of hit, but he wold nat here there off . . . .” Arthur は、夫として Lancelot と Guinevere の行為に憤るよりも、王として騎士社会の秩序と名誉の維持を第一に優先するのである。それ故に、Queen の不義そのものよりも、円卓の騎士が殺害されたという辱めの名誉回復のために Queen を処刑しようとするのだ。“... now I am sure the noble felyshyp of the Rounde Table ys brokyn for ever . . . . And now hit ys fallen so . . . that I may nat with my worshyp but quene muste suffir dethe . . . .” (1174) 名誉を中心とした秩序維持を念頭に置く Arthur の復讐心は、従って、汚辱がそそがれた時に消えてしまう。三つの作品に共通して Arthur は戦場で

落馬し Lancelot に救われるのであるが、その Lancelot の行為に感激し Guinevere 返還にも快く応じるのだ。だが、MA においてはその Arthur が Lancelot をフランスへ追討することを自ら宣言し、MH においても追討の準備を率先して行う。しかし Malory は Arthur の戦意喪失を特に強調する。Arthur は戦場で完全に戦意を失い、Queen の返還では Lancelot の寛大さに涙にむせぶ。

この Arthur の行動理念は、Lancelot にも通じる。MA では Bors が Guinevere 救出を Lancelot に進言し、Lancelot はこれに従う。Malory はこの構成を受け継ぎつつ、Bors の忠告を典型的な汚辱と名誉回復の図式より成り立たせる。

“I woll counceyle you . . . insomuch as she ys in payne for youre sake, that you knyghtly rescow her; for and ye ded ony other wyse all the worlde wolde speke you shame to the worldis ende.” (1171)

Lancelot は味方の合議でも同じ結果が出ると、自らも Queen 救出を決心する。救出に向う Lancelot はこれまでに苦楽を共にした多数の友人を殺すことになるのを知っている。これは、自己とその属する社会の名誉回復を目指すために他を省みない行為である。そして彼は落馬した Arthur を救うが、これは自分を騎士に叙任してくれた王をここで見過すことは、自分自身とその騎士団にとって不名誉な行為となるからである。そしてこの行為は、彼が Arthur の騎士を殺害した事の償いとなる。また Pope の仲裁によって Guinevere を返す時も、そうする事は Queen の身を守ると同時に、Lancelot らの名誉回復ともなる。図式的な名誉指向に基づく Lancelot のこれらの行動は Malory の独創である。

このように、Arthur と Lancelot の理念は一致しているのであるが、では Gawain のそれはどのようなものであるのか。まず、Lancelot の贖罪の申し出に対する Arthur と Gawain の反応を追ってみよう。MA、MH で

は、講和のために Lancelot は自らの追放、聖地巡礼の旅を申し出るが、これに感激する Arthur と講和に頑に反対する Gawain の姿が対比される。Mにおいては Arthur と Gawain の感情の落差はさらに激しくなる。ここでは Lancelot の申し出に Arthur ばかりでなく、全宮廷が涙してこれを聞くのに対し、Gawain は、たとえ Arthur が Lancelot に同意しても、自分は決して妥協しないと断言する。

“ . . . Lat the kynge do as hit pleasith hym, I woll never forgyff the my brothirs dethe, and in especiall the deth of my brothir sir Gareth. And if myne uncle, knyge Arthur, wyll accorde with the, he shall loose my servys . . . . ”(1200)

ここにおいて Gawain は完全に孤立し、Arthur 軍団を率いるものは実質的には Arthur ではなく Gawain 唯一人となる。

この Gawain の孤立は、単に Gareth の死に起因する憎しみから来ているのであろうか。たしかにこれは孤立の大きな要因となっはいるが、さらに深い所には、Gawain と Arthur, Lancelot との間に行動理念の相異があるようだ。Arthur と Lancelot には、主導者である自分と自分の騎士団の名誉と利害を優先する理念の一致が見られた。ところが、Gareth の死後 Gawain の復讐心を導く理念は、純粹に個人的感情に根差するものである。彼の報復意志の根底にあるものは、Gareth という彼の肉の一部を切り取られたことに対する抗議なのだ。切り取られた肉は、Lancelot が申し出、Arthur が受け入れたような償いによっては決して元通りにはならない。Gawain は自分か Lancelot かどちらか一方が死ぬまで戦い抜くと言うが、仮に Lancelot を殺しても Gawain の傷は癒えることがないのだ。彼の個人的動機に基づく行動理念は、Arthur 及び Lancelot のものと全く異質である。Gawain におけるこの異質性故の疎外は、彼の苦惱をいや増すのである。MA では Gawain と Arthur は Lancelot への激しい憎悪を終始共有し、MH では理念的な対立を示唆する表現はない。Malory は、Arthur, Lancelot と

Gawain をその理念によって対立させることで、Gawain の孤独と悲劇性を深い所から浮き彫りにしている。

4. Gawain の肉体的限界認知：Lancelot を追って海を渡った Arthur とその騎士団は彼の居城を包囲する。長びく戦火に決着をつけるべく Gawain は Lancelot に決闘を挑むが、この対決は彼の苦悩の唯一可能な解決への道へ通ずるものとなる。Malory は原典を整理して、二人の対決における Gawain の生命の完全燃焼を描く。そして Gawain の神話的な力の増大を効果的に使う。<sup>10</sup> 彼の力は午前中から正午にかけて増大するのであるが、MA では力の増大にもかかわらず Gawain は Lancelot を負かすことは出来ないが、Lancelot とて決定的な力の差を見せるわけでもない。MH においては決闘は二度行なわれるが、そのいずれにおいても、Gawain はその絶頂期に Lancelot に撃ち倒される。Lancelot と Gawain との力の差は余りに大きく、強調されるのは Lancelot の武勇である。

さてMにおいては前後二回の戦闘で、いずれも午前九時頃から正午にかけて Gawain の力が増大し、この間 Lancelot は防戦一方を強いられる。が、正午を過ぎると突然 Gawain は通常の力となる。“... whan it paste noone sir Gawaynes strenghe was gone and he had no more but hys owne myght.” (1217) ここで Lancelot は勢を盛り返して彼の頭部に致命的な一打を浴びせる。このようにMにおいては、Gawain の急激な力の減退と、それに伴う敗北は、Gawain に自分の力の限界を知らせることになる。またMでは、Gawain の力の秘密は Arthur にしか知られていず、Lancelot を含む他の騎士に Gawain の力の意外性を印象づけると共に、さらに全力を出しても Lancelot に勝てないという事実を知ることによって Gawain は自分自身の敗北を痛烈に納得させられることになる。Arthur と Lancelot から孤立し、報われない Gareth の死の悲しみに打ちひしがれる Gawain は、ここに於て肉体的にも完膚なきまで打ちめされる。Malory の Gawain は苦悩の慰めを得ようとしてより深い心的、肉体的苦悩に陥る。彼を包む悲劇性は二重、

三重に強められるのだ。

5. Gawain の悔悟：さて Gawain は Lancelot から受けた傷が原因で死ぬことになるのだが、この Gawain の死の意義を次に探ってみよう。

Malory はここで MH より構成を、MA より Gawain の死の詳細を借用する。MH では Dover に着いた Gawain は Mordred 軍の一兵率に船の櫂で古傷を打たれその場に倒れ伏して息絶える。MH の Gawain には自己の罪の悔悟がない。一方 MA の Gawain は、まず Arthur の仏領を侵略する Rome 軍との戦いで古傷が開き、二度と武器を取れないままイギリスに渡る。Gawain は死を眼前にして自らの非を悟り、Lancelot に許しを乞う。

“ . . . si sui plus dolenz de ce que ge ne puis veoir Lancelot, ainz que ge muire, que ge ne sui de ma mort; que, se ge veisse celui que ge sei au meilleur chevalier del monde et au plus cortois et ge li peüsse crier merci de ce que ge li ai esté si vilains au derrien . . . . ” (212)

(“I regret more not to be able to see Lancelot before I die than I regret my death, for, if I saw him whom I know to be the best knight in the world and the most courteous, I could plead for his forgiveness for having been so villainous toward him at the last.)

さらに Gawain は Lancelot に自分の墓に詣でるようにことづける。Malory はこの MA の Gawain の悔悟を受けつぎ、さらに発展させる。M に於て Gawain は、Dover の合戦ののち瀕死の状態で見られ、Arthur のもとに運ばれると次のように言う。

“ . . . all I may wyte myne owne hastyness and my wyfulnesse, for thorow my wyfulnes I was causer of myne own dethe . . . . thorow me and my pride ye have all thys shame and disease . . . . ” (1230)

ここで彼は完全に自分の誤ちを悟るのだ。死に臨んでより高い現実への認識を得るのだ。彼は Lancelot と自分との絆、そして Arthur の宮廷における Lancelot の果たす役割を認める。

“ . . . had that noble knyght, sir Launcelot ben with you, as he was and wolde have ben, thys unhappy warre had never ben begunne; for he, thorow hys noble knyghthode and hys noble bloode, hylde all youre cankyrde enemyes in subjeccion and daungere.” (1230)

さらにMに於ては Gawain は紙とペンを要求し、自分の血をもって Lancelot へ手紙を書く。その中で Gawain は、自分の死は自らが招いたこと、そして Lancelot に、自分たちの間にあった友情 “love” を思い出し、窮地に立つ Arthur を救いに駆けつけるように懇願しつつ息を引きとる。

“ . . . I woll that all the worlde wyte that I sir Gawayne, knyght of the Table Rounde, soughte my dethe, and nat throw thy deservynge, but myne owne sekyng.” (1231)

この Gawain の悔悟は、死を眼のあたりにした Gawain が、現実の世界の悲哀より上昇し、より高い精神性へと達した証しである。Gawain の忍耐、苦悩、そして Gareth の死を贖うべき闘争は、純粋に人間的平面の上に於てなされた。激しく燃え尽きた今、死を予感する彼の精神性の高揚は、Gawain の人間的成長を強く我々に印象づける。

6. 死の主題：さてこのようにして Malory の描く Gawain の生と死を様々な面から考察してきたが、それでは、Gawain の死は物語全体においてどのような意味を持つのであろうか。それを知るために、死後の Gawain と、その後残された人々がどのような末路をたどったのかを調べよう。まず三作品に共通して、Gawain は反逆者 Mordred との決戦を控えた晩の Arthur の夢の中に現われる。彼の周囲には、彼が現世で力を貸した人々の霊が群がり、彼はこれらの人々によって魂の救済を得たという。死後の Gawain の

救いが明らかにされるのである。彼は Arthur に、翌日の Mordred との決戦を中止せよと忠告する。が、MA の Arthur はこれを聞き入れず、MH 及び M の Arthur も運命のいたずらによって決戦を余儀なくされる。瀕死の Arthur は Avalon の島へ傷を癒すべく出発するが、時すでに遅い。Arthur の死は他の登場人物の贖罪によって贖われるのである。Malory は MH の記述に拠りつつ主要な登場人物の懺悔と改悛の行末を明らかにする。

まず Guinevere であるが、MA の Guinevere が Mordred, Arthur による報復を恐れて女子修道院に入ったのに対し、MH 及び M ではその動機は贖罪の意志である。M では Guinevere は女子修道院で人々も驚く厳格な節制を行ない、そこで “abbas and rular” とまでなる。さらに Malory は MH から取った Lancelot と Guinevere との偶然の邂逅に於て、Guinevere が二人の罪とその結末を明らかにすることで彼女の悔悟の深さを示す。彼女はこうして改悛と節制のうちに生き、祈りが聞き届けられてその一生を終える。一方 MH, M における Lancelot は、Guinevere との邂逅で自らも改悛の意を固め、彷徨ううちに Arthur の墓を安置する庵に着き、そこで墓を守って一生を終る。さらに M に於ては、Lancelot はその改心と徳により bishop となる。また彼の悔悟は、Guinevere の遺体を Arthur と並べて葬る時に自らの非と罪の意識に悶絶する程に強い。彼の死に際しては、庵の主である隠者が、Lancelot を迎えるために天国の門が大きく開くのを夢枕に見る。このように Lancelot と Guinevere の罪の認識と改悛、そして救いは完璧に描かれている。これに加えて M では、MA, MH では疎かにされている Lancelot の部下たちの行動を明らかにする。Lancelot と庵で生活を共にする八人はいずれも腹心の部下であり、現世の所有物を一切捨てて身の汚れを清め、Lancelot の死後は故国に帰り “holy men” として余生を送る。

Malory はこのように、Gawain の救いを確認するばかりでなく、作品全体を荘厳な祈りの宗教的雰囲気の中にしめくくる。これは中世人としての Malory の倫理の当然の帰結であろうし、また恐らくは牢獄中でこの物語を

書いたであろう人間 Malory の、救いへの切なる願望の現われでもあろう。<sup>11</sup>

ここで以上の考察をふまえて三作品における Gawain 像を総括し、Malory の Gawain をその円卓の崩壊の中に位置づけよう。まず MA での Gawain は性格的に報復心が強く、Gaheriet の死にも葛藤なく復讐を誓い、温情と人間信頼を欠いている。一方 MH に於ては Gawain の性格描写は皮相的で、彼の報復の誓いは唐突である。彼の Lancelot への憤怒は自己破壊的であり、彼は相対的に Lancelot を高める役割を果たすだけだ。

Malory における Arthur の円卓騎士団は、騎士社会の理想を実現すべく秩序づけられた封建的社会集団であった。これは Arthur をその頂点と仰ぎ、Gawain と Lancelot とをその二大支柱とする社会であった。この忠誠と友愛で築きあげられた一見完全な理想社会は、しかしながら、その内部に反逆、猜疑、愛憎の葛藤などの脆さを内包していた。この内外の矛盾による緊張は、Lancelot と Guinevere との密通によって怒張し、Lancelot による Gareth 殺害によって一気に噴出した。この Gareth の死に決定的な打撃を受けたのが Gawain である。円卓はこの二大騎士の離反により崩壊してゆく。

Gawain における肉親の死の悲しみと Lancelot への信頼を裏切られた苦しみは、彼の高潔さと忍耐力によって倍加し彼自身を押し潰す。Arthur の騎士社会が音をたてて崩れてゆく中で、彼は盲目的な憎悪に駆られ、孤立し、報われることのない報復を叫んで死へと突入する。この Gawain の死は、Malory の設けた中世的枠組みの中で究局的には救済されるのだが、運命に翻弄され、苦惱に打ちひしがれ、死との交換によってのみ高い次元への精神的高揚を得る人間の生き様は、Gawain に生命の律動と鮮やかな血色を与え、普遍的な人間の悲劇性を我々の心に刻む。

#### NOTES

1 E. Vinaver (ed.), *The Works of Sir Thomas Malory*, 2nd ed. (Oxford:

- The Clarendon Press, 1973). 以下本注内では *Works* と略し, Malory の作品からの引用はすべてこのテキストに拠る。
- 2 この作品は一般に *Mort Artu* とも呼ばれる。以下この作品からの引用は, Jean Frappier (ed.), *La Mort le Roi Artu* (Paris: M. J. Minard, 1965). に拠る。またこの作品の英訳は, J. N. Carman (trans.), *From Camelot to Joyous Guard* ed. N. J. Lacy (Lawrence: Univesity Press of Kansas, 1974). に拠る。
  - 3 この作品はまた, the *Stanzaic Morte Arthur* とも呼ばれる。以下この作品からの引用は, J. Douglas Bruce (ed.), *Le Morte Arthur* (London: EETS, 1903). に拠った。
  - 4 Lancelot は自ら仏国の王であり Arthur には主従関係で任えているだけである。従って Arthur の円卓は, そこから離反できる者にその秩序保持の大部分を頼っていることになる。これは Lancelot の Guinevere との密通に, より重大な意味を与える。
  - 5 Malory は Gareth のために “The Tale of Sir Gareth” を創作している。この中で, Gareth は忍従と謙譲の美德を称えられ, また武力においては Lancelot と互角であり, Lancelot に騎士叙任を受けて後は彼の寵愛を一身に受ける者となる。*Works*, pp. 298-299 参照。
  - 6 *Works*, p. 1183, p. 1185, p. 1189, p. 1199, etc.
  - 7 *Ibid*, p. 1184 この Gawain の言葉は, 個人的理念より宥せられていることに注意したい。Arthur や Lancelot の名誉回復理念は集団指向的であり, 社会的利害の均衡が優先せられる。
  - 8 後に Lancelot は Gawain に向って Gaheiret 殺しを完全に否定する。*Le Morte Arthur*, II. 2414-15 参照。
  - 9 Arthur は円卓の騎士に向い, 彼が掲げる騎士社会の理想的道徳律を明らかにするが, これはここで我々が Arthur に見る所のそれではない。*Works*, p. 120 参照。
  - 10 Gawain の力の神話の由来については, B. J. Whiting, “Gawain: His Reputation, His Courtesy, and His Appearance in Chaucer’s *Squire’s Tale*”, *Medieval Studies*, IX (1974), pp. 194-196. を参照。
  - 11 彼の獄中での執筆の可能性については, Edward Hicks, *Sir Thomas Malory: His Turbulent Career* (1928; rept. New York: Octagon Books, 1970), pp.66-73. を参照。